

徒然なるままに…47

～校内研修会④より…「国際交流教室」の役割と意義～



平成28年8月25日
白島小学校 研修部

(文責 有森 歩)

暑い暑い毎日が続いていますが、先生方、体調は、いかがでしょうか。

先日は、2部構成で、「国際交流教室」理解のための研修を行いました。白島小学校では、3年前にも、このような研修会を行ったそうですが、私を含め、多くの先生方にとっては、初めての研修だったことと思います。



「国際交流教室」は、市内に数校しかありません。外国にルーツを持つ子どもたちやその保護者にとって、言葉や生活習慣を含め、多くのサポートが受けられる、とても貴重な場所です。それだけではありません。私たち教員にとっても、「国際交流教室」を知り、子どものルーツに触れ、連携をしながら支援を考えていくことは、外国にルーツを持つ子どもだけでなく、様々な特性を持つ子どもたちを理解する上で、ユニバーサルな発想で物事を考えるきっかけとなったのではないのでしょうか。今回の研修を、ぜひ、今後の教育活動に生かしていただけたいと思います。

第1部では、寺岡さんのお話から、考えることがたくさんありました。話の中で、私が子どもの頃に見た、テレビの中の中国残留日本人孤児の家族との再会場面がよみがえりました。同時に、記憶にはあるものの、いつか自分の心の中からも、社会からも、過去の出来事になっていることに改めて気付かされました。寺岡さんの話から、71年前に終わった戦争は、そこで終わりではないこと、戦争に翻弄されながら人生を送り、子孫にもその影響が及んでいる現実を思い知らされました。

このような地域、保護者に支えられている、白島小学校の教員だからこそ、チャレンジしたい授業が思い浮かんできました。それは、戦争の歴史的な経緯だけではなく、戦争がもたらした人的・物的な被害が後世に様々な形で影響を与えていること、国や文化の違いだけでなく、育った世代のギャップをも含んだ多文化社会の現状…と、掘り下げていくものです。どこまで実現できるかは、分かりませんが、6年生が1月に授業提案させていただこうと構想中です。乞うご期待！

次に、第2部の「国際交流教室」の先生方の話から、「その通り！」と感じた自分の経験を二つお話しします。

一つ目は、生活言語と学習言語についてです。(提案された内容と取り違えていたらすみません。)私が南米パラグアイに住んでいたときの話です。周りに日本人がいない孤獨な外国人である私にとって、おしゃべりは、3度の食事と同じくらい大切なものでした。話す相手を見つけ、とにかく、かかわること。そんな私が体得したのが、調子よ

く話すスピードと、とりあえず何か言葉を返す会話術です。現地の友達や同僚には、「流ちょうなスペイン語だね。」とよく言われましたし、「彼女は、スペイン語がよく分かる。」と褒めていただくこともしばしばありました。職場では、電話対応も私の仕事で、自分でも、会話には、少し自信がありました。

しかし、これがひとたび長い文章を書く、読むことになると、まったく別物で、難解な学習指導要領や新聞の社説などを読むときは、辞書を引きっぱなしだし、職場に提出する書類はおかしな文法の連発でいつも同僚に直してもらう始末でした。かたや、同じ時間をパラグアイで過ごし、毎日こつこつスペイン語を学び続けた友人は、今や通訳ができるほどのスペイン語力になりました。母語ではないからこそ、話す・聞く・読む・書くという、言語の習得を意図的、体系的に鍛える必要があると感じた経験です。



二つ目は、二つの言語を「ハーフ&ハーフ」ではなく、「ダブル」にすることがどれだけ大変なことかということです。自身の思考を支える言語を持つことがどれだけ恵まれていることなのかを、私は、パラグアイに住む日系2世の友人から学びました。

A君は、現地生まれで、周りに日系人のいる、日本のコロニアに住んでいます。家庭では、日本語での生活で、幼いころから、日本文化にも触れており、日本語検定は1級です。学校は、小学校から大学まで現地校に通い、パラグアイ人として兵役を終えるほど、パラグアイに根付いている優秀な日系人です。これらのことから、どちらの国にも適応しているように見えるA君は、外国人の私にとっては、憧れの存在でした。

そんなA君があるとき、スペイン語で、「私はだれ。」とつぶやいたのです。パラグアイでは、「日本人」と言われ、日本では、「パラグアイ人」と言われる自分は、いったい誰なのかという、A君自身のアイデンティティにかかわる問題だったのです。私は、ハッとしました。そう問われたとき、返す言葉がありませんでした。A君は、「地球人か!。」と笑ってはいたものの、その苦悩は、計り知れないと感じた出来事でした。

A君は、言語習得では、「ダブル」の1人です。そのおかげで、大学進学を果たせました。(パラグアイの大学進学率は10%未満です。)パラグアイには、7000人ほどの日系人が住んでいますが、現地生まれの子どもたちは、小学校のときから、進学先に、現地校を選ばざるを得ない状況のため、日本語もスペイン語も「ハーフ&ハーフ」、つまり、言語能力は、中途半端で、稚拙なまま大人になっていきます。それ故、抽象的な思考が増える小学校高学年から中学校になると、学校の学習についていけなくなってしまいます。したがって、その子たちの学校教育は、そこで終了することになるのです。

歴史的背景こそ違いますが、白島小学校の母語を日本語としない子どもたちが「社会的マイノリティ」にならないばかりでなく、彼らが二国間の架け橋に、そして、「サードカルチャー」を持つ貴重な人材として輝いていくために、言語習得学習における特性を理解することはとても大切なことだと改めて感じました。グローバルな時代だからこそ、私たちの「内なる国際化」も進めていかなければならないと感じています。

先生方は、今回の研修で、どのようなことを感じられたでしょうか。